



## 『今昔物語集』 卷二十六の宿報観について

芹澤, 久恵

---

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2023-03-25

(Date of Publication)

2024-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8515号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482263>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



# 論 文 内 容 の 要 旨

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

『今昔物語集』巻二十六の宿報観について

氏 名 : 芹 澤 久 恵

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名 (主) 樋 口 大 祐 教授

(副) 古 市 晃 教授

(副) 有 澤 知 世 助教

(注) 4, 000字程度(日本語による)。必ずページを付けること。

本稿は、院政期に成立したとされる『今昔物語集』巻二十六「宿報」の中から三話を取り上げ各話の分析と宿報の意味を検討し、そこから宿報観の一端と巻にみられる特徴との相関について考察したものである。

『今昔物語集』巻二十六は、宿報を副題にもつ巻である。宿報とは、前世からの報で因果応報と同じ理念をもつ。同じ理念をもちながら、因果応報の巻は仏法部に宿報の巻は非仏法部に置かれていることから巻の仏教性についてこれまで仏教性の有無について検討が行われてきた。この他、巻の特徴については、地方的説話が多く説話の要素には偶然性・奇異性がみられる。まず地方的説話が多いことについてだが、宿報の巻は当時辺境とされた国々（陸奥国・能登国・土佐国など）を舞台とした説話が多く収められている。この辺境を話材とする背景には、『今昔』の国家意識や中央的視点が関わっているとする見解が出されているが、そのような国家意識や中央的視点が巻の宿報観とどのように関わるのかこれまで検討されていない。偶然性・奇異性については、巻二十六には、偶然的で奇異や希有な語でもって語られる話が多くみられるが『今昔』全体でみると宿報は偶然で奇異な話に限って用いられているともいえない。宿報の巻で特徴的にこの要素がみられる背景には、『今昔』が目指そうとした宿報観と関わっていると考えられる。そこで本稿では、これまで行われてこなかった巻の宿報観の一端を明らかにすることを旨とし、さらに宿報観とこれらの巻にみられる特徴との相関について考察を行いたい。

第一章は、巻の冒頭話である第一「於但馬国鷲、鬮取若子語」について考察したものである。出典とされる『日本霊異記』上九「嬰兒鷲に擒られて他国に父に逢ふこと得る縁」との比較検討を中心にその具体的改変を分析し『今昔物語集』が目指そうとした物語世界と宿報観の一端を明らかにするものである。『日本霊異記』の物語世界については、これまで因果関係の中で考察されてきた本文末尾の文言に注目しこれまでの解釈とは異なる新たな解釈を行った。この解釈により『日本霊異記』の物語世界は、人間の理解の難しい出来事に対し天を用いた解釈を行っていることを示した。一方『今昔物語集』では、『日本霊異記』と異なる五点の改変を取り上げ物語世界と宿報の叙述方法に関わる変容について考察を行った。『今昔物語集』の物語世界については、『日本霊異記』にみられない日常性が付与されていること、『日本霊異記』に比べより偶然的で奇跡的な展開へと改変が行われていることが考えられる。宿報の叙述方法については、養父の存在を新たに際立たせ二人の父の宿世へと改変が行われていることや異なる立場が共通して物事の認識を偶然から必然へ転換する様子がみられる。これらの改変から、宿報の巻以外でみられる宿報の主観的な解釈を超えた新しい宿報の叙述がみられると考えられる。『今昔物語集』

の物語世界では、『靈異記』が天を用いた解釈を行っているような人間の理解の難しい出来事を日常的世界の中に落とし込んで描こうとしていると考えられる。そして、それを人間目線で捉えようとするときそれは偶然により生じたものとなり、また奇異なこととする受け止め方が生まれたと考えられる。宿報の巻にみられる偶然性や奇異性はこのような物語世界により生まれたものと考えられる。

第二章は、卷二十六第二「東方行者、娶蕪生子語第二」について考察したものである。問題としたのは二点で、一点はこれまで男女の交接なく子が誕生する異常出生の様相を本文に即して分析し子の誕生までの具体的様相について考察するものである。もう一点は、登場人物の表象と男の宿世について考察したものである。異常出生の分析方法は、主に〈垣の境界性〉〈男の聖性〉〈蕪をめぐる男女の行為〉の三点から構成される。まず垣の境界性についてだが、垣の内外でみられる蕪の表記の対比性や男女の蕪をめぐる行為に注目し垣の内が日常世界で垣の外が異界と設定されていることを示した。男の聖性については、異常出生を語る時父親の聖性が語られることが多いことから当該説話でも本文の男の叙述に関わる二点に注目した。一点は、異界と設定できる垣の外から男はあらわれること、二点目は男が決まった季節にあらわれることである。ここから男にマレビト的な聖性をもつ存在であることを示した。蕪をめぐる男女の行為は、〈盗むこと〉〈投げ入れること〉〈翫ぶこと〉の三点から検討した。盗むことについては、神の世界のものが人の世界のものとなる時盗みのモチーフが使われることを踏まえ、男が蕪を盗むことは異界のものをこの世にもたらず行為であったと考えられる。投げ入れることについては、『今昔物語集』の用例の中で投げ入れられることでそのものの力が発現する用例を示しながら、垣内へと投げ入れられる蕪は異界から日常世界へ投げ入れられることで男の靈力が発現した蕪になっていると考えられる。翫ぶことについては、古代の「もてあそびもの」は靈力があると信じられているものに対して用いられていることに注目し、娘が翫んだ蕪は男の靈力の宿ったものとして描かれていると考えられる。娘と母の人物表象についてだが、娘と母の二人には共通して巫女的性格が読み取れることを示した。娘の表象については、本文中で〈処女性が強調されていること〉〈娘に関わる不可解な叙述がみられること〉〈男の妻となること〉の三点から検討した。二つ目の不可解な叙述については、本文中の叙述をそのまま読み取ることをせずその言葉のもつ背景について検討した。ここから、巫女的性格を読み取れると考えられる。母の表象については、男が聖性をもつ存在とし垣の外を異界と設定することで、垣を越境する母の行動から巫女的性格を読み取れることを示した。異常出生のモチーフと娘と母に巫女的性格が見られることに加え最後に男は娘を妻としその地に留まることから本話には神婚譚を備えた村落共同体の起源説話が背景にあり娘や母の一族がその原話の伝承者であると考えられる。神は聖性が消え人間の男に描かれていることから、『今昔』には前話である第一話と同様に日常世界の中に落とし込んで語

ろうとする志向がみられる。当該説話は、男の知らぬ間に誕生した我が子の存在や子との対面を果たすまでの偶然の連鎖が描かれ、人間の意志や予想を超えた不思議なめぐり合わせを感じさせる男の宿世譚となっている。

第三章では、第九話「加賀国諍蛇蜈島行人、助蛇住島語」について考察したものである。物語の舞台となる猫の島は現在の石川県舳倉島に比定され、その島の神は舳倉島にある奥津比咩神社と考えられている。当該説話は猫の島の起源譚と後日譚で構成されていると考えられることから起源譚と後日譚に分けて考察を行う。島の起源譚では、島の神と熊田宮、島のもつネットワークの三点について考察を行った。島の神の様相からは、島が多様な関わりをもつ島であることを示した。例えば、島の神には航海の神の性格がみられ、奥津比咩神社は古くから対岸航路の守護神であることや気多社の異伝とされる縁起の中に舳倉島と対岸の鳳至郡が関わりもつことが示唆されている。ここから島と対岸の鳳至地域、気多大社との関わりが示唆され、また本文中に現れる島の神という敵の存在にも大陸までをおさめた島の広い関わりが示唆されるものとなっていて、島の神の様相には日本海に浮かぶ孤島の姿ではなく様々な関わりをもつ島の姿がみられるものと考えられる。熊田宮は、本文中では島の神と「我が別レノ御スル」という関係にあり、島への入り口として機能する一面がみられる。地理的には手取川河口部で古代の比叡湊に隣接する地域と思われる場所に鎮座していたと思われ、当時の中央や日本海沿岸を往来する人々により交流が生みだされ関わりあう世界を視野に収めていたと思われる。島のもつネットワークについては、島から出土した海獣葡萄鏡と平安時代を中心とした祭祀遺跡である寺家遺跡で見つかった鏡が同形同箔のものであることから、寺家遺跡と関わりをもつ気多社の宗教ネットワークの中におさまっている可能性を指摘した。後日譚では島と島民の表象の分析を中心に考察を行った。後日譚は、島にまつわる三つのエピソードから構成される。このエピソードは、熊田宮から順に遠い視点で島が捉えられ島をみる外部の視点と視野が日本海と大陸までを包むようなものへと遠く広がっていることを指摘した。島をみる外部の視点から豊かで繁栄した島とそこに住む島民の閉鎖性が描かれるが、この閉鎖性について当時の北陸の国司と在地の人々の関係が関わっていると考えた。能登国を舞台にする世俗説話には、北陸の国司と在地の人々の攻防がみられ富を搾取するされる関係を読み取れることから国司ら支配者層の人々の心性によって富と閉鎖性の二つが同時に表象されたと考えられる。

終章では、二話一類の関係にある冒頭二話の共通する語りの視点と父が旅人であることについて取り上げた。語りの視点については、父の視点にたった父子の宿世が語られることで、子の存在が捨象されモノ化した存在になっていると考えられる。日常的世界観の中で生じた偶然のように描くとき、旅の者との出会いやそこから生まれる奇跡が話材に用いられていると考えられる。第九話については日常の

外部を舞台にした話で、特に後日譚は外部の視点から島民の閉鎖性と繁栄する島を描くが、その島の表象は日常の限界を打開し新しい生活や希望を願う人びとの心性が日常の外部に託された形であらわれていると思われ、日常世界この表象された外部の世界を往還することで日常世界とは異なる島や島民の存在を宿報によるものと解釈する受け止め方が生み出されたと考えられる。

## 論文審査の結果の要旨

氏名	芹澤 久恵	
論文題目	『今昔物語集』巻二十六の宿報観について	
要 旨		
<p>本論文は、12世紀初頭成立とされる『今昔物語集』の巻二十六「宿報」のなかの三話の分析を通して、「宿報」の意味するものと同巻がそう名付けられた意義について考察したものである。</p> <p>「宿報」は辞書的には「因果応報」とほぼ同義の表現だが、『今昔物語集』では「仏法部」に位置づけられる巻二十が「因果応報」の名づけを持つのに対し、「宿報」の名づけを持つ巻二十六は非仏法的な「世俗部」に分類されている。</p> <p>従来、巻二十六については、地方を舞台とする説話が多いこと、また、説話の構成要素に偶然性・奇異性が見られることが指摘されてきたが、これらの諸要素と「宿報」の関係性についてはまだ解明されていない。</p> <p>本論文は先行研究を踏まえつつ、特徴的な三つの説話を集中的に考察することを通して、当巻の特徴についての仮説を構築することを目指したものである。</p> <p>第一章では、同巻の第一話「於但馬国鷲、剛取若子語」について考察している。まず、この説話のプレテクストに『日本霊異記』上巻第九話があり、そこでは理解しがたい非現実的な出来事に対して「天」を用いた解釈が行われていることを指摘した。他方、『今昔物語集』巻二十六第一話では、「天」のような超越的な存在は意識されず、より日常性を付与された語り口で説話が進行している中で偶然的・奇跡的な出来事が発生している。つまり、人知を超えた奇跡的な出来事に対して、超越的な存在や隠れた因果関係等による説明が付されないことで、読み手に対して、出来事の不思議な意味合いがより強く刻印される仕掛けになっている。「宿報」という言葉は、そのような、他の原理によっては説明しえないような不思議に対して、とりあえず名付けられた語彙であると位置づけられるのではないかと推論している。</p> <p>本章は『日本霊異記』所載のプレテクストと『今昔物語集』の当該説話を丁寧に比較した結果、細かいところで疑問点がないわけではないものの、おおむね妥当な結論を導き出していると評価することができる。</p> <p>第二章では、同巻の第二話「東力行者、娶蕪生子語第二」について考察している。最初に、男女の交接なく子供が出生するという異常出生のストーリーを成立させるための環境設定として、幾つかの民俗的な解釈コードが使用されていることを示そうとした。具体的には、旅する男と在地の家の女が「垣」によって隔てられた位置関係にあったこと、男が都と地方を往還するくまればと&gt;的な位相を備えていること、男が姪欲を満たすために使用した蕪を「垣」の内側に投げ入れ、女がそれを玩んだあと食することで、聖なるものの「越境」が実現する仕掛けになっていること、在地の家の母娘に巫女的な性格が見られること、等である。次に、子の認知を迫られた男がこの地に留まることを決意するこの説話の結末が、神婚譚を含む共同体の起源説話の形を備えていることを指摘した。そのうえで、家の女が蕪を食したこと、女が妊娠したこと、男との再会等の出来事の展開がすべて偶然の連鎖として描かれており、超越的な存在や合理的な因果関係によって説明されていない点が、第一話と共通していることを指摘している。</p>		
主査記載 氏名(自 署)	樋口 大祐	

本章においても、丁寧な読解に基づく民俗学的コードによる解釈の部分はおおむね妥当な結論になっていると思われる。ただし、説話全体を印象付ける、男性中心主義的（ホモソーシャルな説話の流通圏を想定させる）な滑稽譚として読ませようとする語り手の志向や、それが女性の立場からすると不条理譚以外の何物でもないことの「落差」の存在に対して、充分認識はしているものの、具体的な分析には踏み込まなかったように思われる。

第三章では、同巻の第九話「加賀国諍蛇蜈島行人、助蛇住島語」について考察している。当該説話は現在の石川県舳倉島が該当すると思われる「猫の島」の起源譚と後日譚によって構成されており、前半を熊田宮の信仰圏における起源神話、後半を国衙を中心とする人々の島嶼地域に対する眼差しの産物であるとしており、「猫の島」が多様な交通のネットワークの交差点として存在していた史実を反映していると結論付けている。

本章は『海港都市研究』17号に掲載された論文をもととしており、熊田宮や能登半島における宗教史的な認識に関しても、一定の深度に達していると思われる。後半の指摘は、巻二十六全体の説話の語り手の眼差しの問題に発展しうる可能性を秘めていると評価できる。

以上、本博士論文はわずか三説話のみを考察の対象としたにすぎないが、徹底して細部の表現にこだわることを通して、先行研究が解き明かしえなかった論点を一定程度把握することに成功しており、博士論文として十分な達成を示していると思われる。

## 審査委員

区分	職名	氏名(自署)	区分	職名	氏名(自署)
主査	教授	樋口 大祐	副査	教授	古市 晃
副査	准教授	石山 裕慈	副査	助教	有澤 知世
副査	教授	横田 隆志			